

CONTENTS

柳澤孝彦……………1

時代の華一輪

井上武吉・栄久庵憲司……………2

勝連盛伸・黒竹節夫……………3

坂本和正・高橋志保彦……………4

土屋寿満・内藤恒方……………5

並川恵美子・橋本京子……………6

三浦啓子・三輪正弘……………7

a.a.c.a'90長野シンポジウムに参加して

池田尚子・酒井 真・
竹本真理世……………8

中川幸成・三上清一……………9

メタルワークのストリートアート
デザインコンテストの結果報告…10

表紙写真：オットー・ワグナー設計の
アム・シュタインホフ教会を飾るステ
ンドグラス (撮影・柳澤孝彦)



建築家

柳澤孝彦

(社)日本建築美術工芸協会理事
広報委員長

年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからずといふごとく、四季を確実に繰返してきた自然の営みの姿は、有史前から変わってはいない。しかし人々の心は、その人々の心の数と、生きている刻々の刹那や月日の時間の積だけ無数に千差万別の貌をつくってきた。それらは時に、芸術として時代の貌をつくることもあった。その時芸術は、時代の華のごとく咲き乱れるものであった。ルネッサンスや、アールヌーボーやセセッションの時々――。

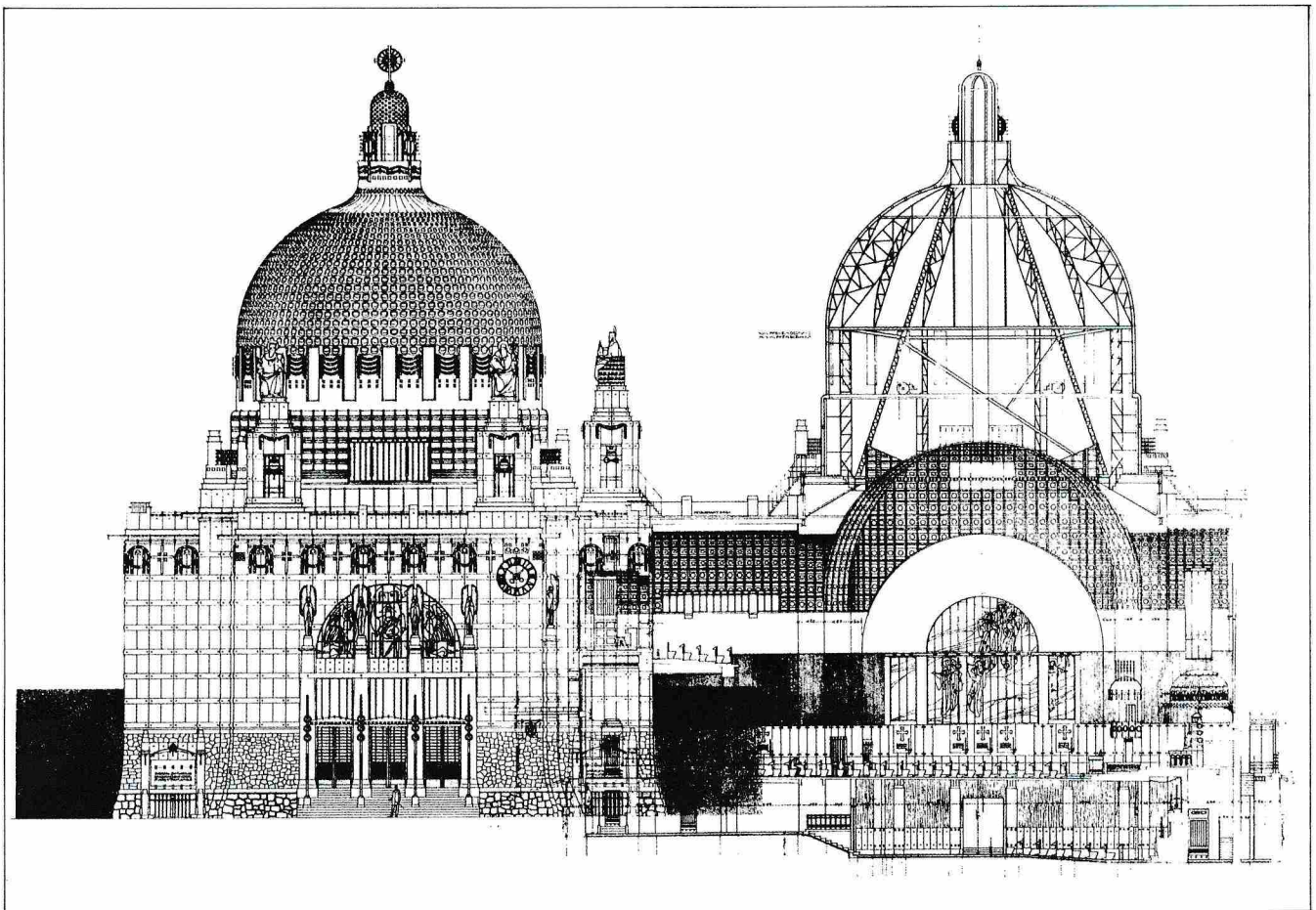
それらはいずれも、建築や美術やそして工芸の分野が相互に有機的な関係を持ちながら、総合化された芸術の運動として、め

くるめく時代の華を咲かせてきた。

現代にもこのような時代の華を咲かせようと、建築美術工芸協会の活動がいよいよ活発化している昨今、本号はいわば現代の華一輪ずつを持ち寄った特集とでも言うべきものとして、会員諸氏の「私と自然」「私と都市」「私と建築」「私と絵画」…「印象に残る風景」「ある街角」「私と生活」…といった思い入れを「一枚の写真」に寄せて語って頂こうというものである。

そして本号の特集をかわきりに、次号からは「時代の華一輪」欄として次々に会員諸氏に登場していただき、デザインや都市の華を語る場としていきたい。

そこで特集の表紙として、ウィーンに咲いた時代の華を選ばせていただいた。オットー・ワグナー設計のアム・シュタインホフ教会を飾る、コロ・モーザの手によるステンドグラスである。コロ・モーザの確かな表現力は、新しい時代へのデザインの息吹きを鮮烈な光で放射している。光の背後には、あの心ときめくようなウィーン分離派の時代が漂っている。クリムトが、シーレが、あのアルマのいたマーラーが、ココシュカらが咲かせた華々は、世紀末の落日のごとき一瞬の輝きのようにも、それはまた来たるべき時代に射し込む光でもあったのだった。



Otto Wagner, Kirche am Steinhof, Projekt 1904



彫刻家
BUKICHI INOUE
井上 武吉
神奈川県鎌倉市山ノ内242-5
TEL. 0467-24-1274

「私と彫刻」

フィレンツェの町から30キロ程離れたチェレ村でのプロジェクト“my sky hole 86-3”は手掛けてから五年目の今年六月にやっと完成した。

チェレ村は、ピストイアの東北部の小高い丘に位置しており、丘の上からは、ダビンチ村が見下ろせる。フィレンツェを中心に開花したルネッサンス文化の息吹を間近



に受けていたところである。

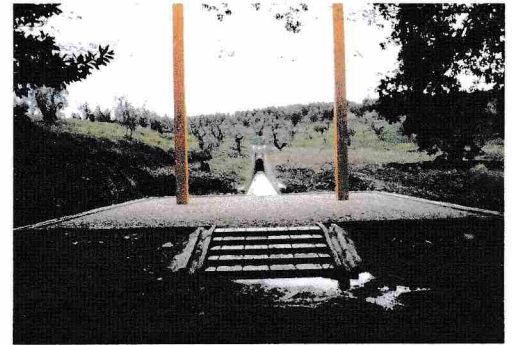
丘にはオリーブと葡萄の畑が一面に広がっていて、イタリアさながらの田園風景である。その中腹にこもりとした緑の濃い不思議な森がある。どういう訳か局部的に雨に降られ周辺とは全く風景を別になっている。

大きい樹木が育ち、湖や溪流があり、水際の石には、苔がはえている。

中世の森と呼ばれているその森に、領主がコレクションした現代美術が点在している。作品は、どれもスケールの大きいものばかりであるが、森に同化して、自然の一部を構成している。それが、ますます不思議さを増し、森の魅力を高めている。ダニー・キャラバン、アバカノ・ピッチ、ソ

ル・ルイット、リチャード・ロング、リチャード・セラアンヌ&ポワリエ、アリス・エイコック、デニス・オッペンハイム、ファスト・メロッティ、……など現在24作品がコレクションされている。

“my sky hole”は、深い木々の間をぬけた南斜面に小さな広場を設け、そこに天と地をつなぐ二本の柱を建



てることから始まった。

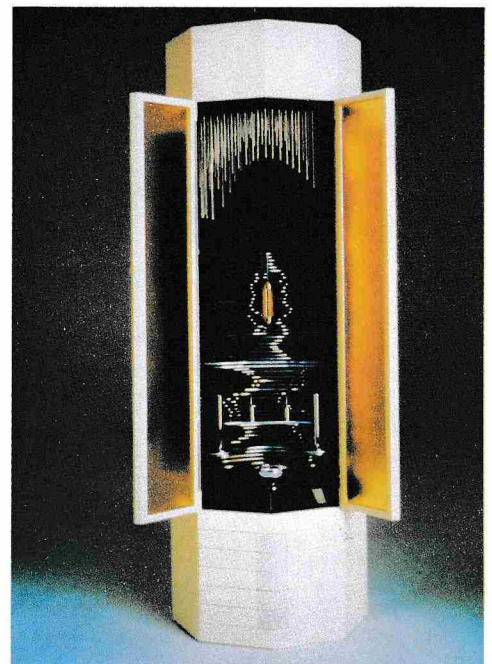
柱と柱の間を通り過ぎると、低い石垣に囲まれた緩やかな坂道が続く。中間地点には、「対話の泉」があって、太陽の光を反射させている。さらに登ると両側の石垣が、いつの間にか人の背丈を越え、その先は、暗闇の迷路となる。この掘られた迷路空間は、宇宙との出会いの空間であり、天空への入口でもある。かつてダンテが、天上と地上の世界を詩で表現したように、ゴシック建築が天上世界への無限なる永遠への意志と衝動を具現化したように“my sky hole”は、ほくの個人的な天と地を結び無言の空間なのである。



株GKインタスティリアル研究所
KENJI EKUJAN
栄久庵 憲司
東京都豊島区南池袋1-11-22
TEL. 03-989-9511

十年程前だったか仏壇のデザインをすることになった。機会あるごとに仏壇の前に坐り、のぞき見る仏壇内部の造形は桁はずれだ。緻密性と言いプロポーションと言い、キラメクばかりの色彩と言い、先達の業の凄さにほとほと感心させられた。特に全体が金色でおおわれている姿はシュール以外の何ものでもない。あまつさえ工芸の技術の粋を駆使した一つ一つの仕上げには、それだけで十分に楽しめる逸物である。仏壇は未来の戸口、彼岸の都市はかくやと思えばかりの須彌壇の輝き、ほのかなあかりのもと、くゆる香の香りはまさに幻想をさそうにあまりあるものがある。どんな小さな

仏壇でもそれなりの宇宙が表現され、大きい。先達の創ったこのシュールな世界、そしてこのシュールと言う言葉ははじめて仏壇をデザインする私にとって既成の観念を打破するに充分だった。すきな宇宙を表現する。どんな形でもよい。色は気儘なのがよい。おもむくままに思いを廻らしたが、一つだけ気持ちの底からどうしても取り去ることの出来ない何かもとめられたのである。それは、デザインされた仏壇に手を合わせられるかどうかということである。魅せられるものに多々ある。だが手を合わせられるかは別の話だ。仏壇をデザインして手が合わせられないようでは仏壇とは言えない。何故か古い仏壇には手を合わせることが出来る。大変な挑戦である。そんな時こんなことを直感した。もしタリが仏壇をデザインしたらどうなるんだろう。すべてが宙に浮いている。萬物は互いにぶつかることなく、摩擦を生ずることなく浮いている。



完全なかたちが美しく浮いている。そのダイナミックなバランスのもと慈愛がこちらを見つめている。エヴァンの目である。台風の目の如くタリの目はこちらを見つめている。思わず手を合わせた。



ハイウッドサービス株式会社
MORINOBU KATUREN
勝連盛伸
沖縄県那覇市西1-24-11
琉球海運ビル2F
TEL. 0988-69-1692

沖縄の塩害・腐食

蝕まれる建築・建造物をいかに守るかをテーマに、平成元年9月、フォーラム「沖縄の建築と塩害・腐食」が開催された。沖縄県においては高温多湿、台風の常襲地帯、海から吹きつける海塩粒子等、過酷な気候条件によりあらゆる建造物の劣化現象が散見される。

絵ハガキにみる碧い空、青い海を背景にした伝統的な石垣と赤瓦屋根の住宅が消え、100%近くが鉄筋コンクリートに変わり住宅景観は一変した。年間平均気温23度、湿度80%の高温多湿の環境のもとでは常時白アリが発生し、強烈な台風を避けるため機能性一点ばりの無粋な箱形コンクリート住宅を自らの手で造ってしまった。しかし、白アリや台風からはのがれる事はできたものの塩害や金属腐食という新たな問題に直面す



ることとなった。

沖縄県における建材等の劣化要因の一つに海塩粒子がある。塩漬けの島—沖縄は、沖縄金属腐食対策協議会の資料によると、大気中に存在する海塩粒子の数は年平均して千葉県銚子市の5.4倍もあり、多い月には15倍近くにもなる。

また他のデータによると金属腐食による経済的損失はその国のGNPの1~4%にも達し、その額は膨大な数字になると推定される。

このように塩害や腐食の著しく早く進行

する沖縄では防錆、防食、塩害防止の対策は緊急な課題である。それに伴う材料や技術の開発は建造物を保護し、老朽化、腐食を防ぎ耐久性や高品質化に資することになる。

基調講演は森田大氏（琉球大学工学部建設工学科教授）、パネリストに成田修一氏（沖縄総合事務局営繕監督室長）、渡久山直樹氏（沖縄県建築士事務所協会副会長）を迎えて福島敏郎氏（琉球大学工学部教授）が討論をコーディネートした。

なお、このフォーラムの聴講者は36業種、380名でした。



株式会社クラフトくろちく
SADAO KUROTAKE
黒竹節夫
京都府京都市山科区竹鼻
竹ノ街道町34
TEL. 075-501-8491

「私と建築」

私は現在の仕事内容を問われた時に、その返答に苦慮する事が多々あります。しいて言えば建築家とお答えしたい解けですが、さほどの実績はありません。私の設計し作りたい建物を好んでいただけるクライアントとの出会が限られているからです。私は10数年前から日本建築の古い民家が大変興味を持ち、以来民家の解体や建築現場で自分なりの研究と独学で仕事を進めております。本来私がデザインの仕事を初めたのは、京呉服の染織が私の仕事の初まりです。以来クラフトのデザインと物作りをして来ました。その作品や商品化される物には、常に日本の伝承美と申しますか、日本の歴史的な美意識を感じさせる物を追求してまいりました。私自身の現在に至る物作りを通して今一番進めたい仕事として住空間にト

ライしてあります。生活に身近に使う道具から、その生活を豊に又生活を守る住空間へと広がってまいりました。現代の多くの住空間としては、都会の土地事情や、さまざまな、日本の生活環境の変化の中で、自然と調和した日本美をほこる、“こころ”安まる空間が失われて来つつあります。私は近未来に対して日本の本来の民族的空間をいかに再生し、かつアメニティ空間としての現代機能を設けた建築を手がけて行きたいと思っております。事例のひとつとして最近の作品をご紹介します。写真の建物は、平成2年4月20日に大阪府の茨木市千提寺に完成したものです。この建物は自然と親しむ事が、企業コンセプトになっている会社のコンセプトホールです。私はこの企業のCIの中で住宅間の原点を表現し多くの人に建物から感じるメッセージを送りたく思い円形竪穴式入母屋造りにした解けです。自然をそこなわずに、自然の中から生み出される建築材料を利用し、機能システムとして

は、キャブシステムを取り入れ設計した建物です。まさに、そのプロセスは、クラフトの建築物と云える様な気がします。建築材料は今、多種にわたり利用されていますが、その意識は日本の風土に永く生き続ける建物が多く広がることを願っています。





方圓館 インテリアデザイナー
KAZUMASA SAKAMOTO
坂本 和正
東京都世田谷区松原3-10-11
TEL. 03-322-1217

形の原型

香港や台湾の廟を訪れた人ならだれしも渦巻形の線香が軒下にくっつも垂れ下る光景を思い出すであろう。真っすぐな線香しか知らない私達には何とも奇異な第一印象である。そもそも私達は線香の細く垂直な



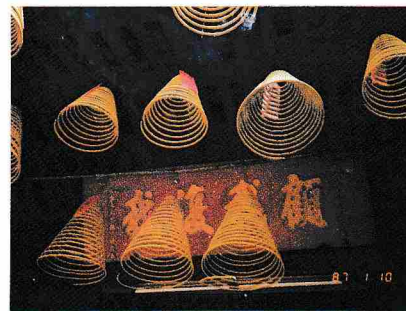
形姿の中に、気持を正したり精神を集中する行為を無意識に集約しているのである。

線香の発祥がどこにあるのか調べたことはないがあまたの宗教祭儀に香りが大切であったことはうなすける。香りを発する線香はまた、細い煙をたてる点火でゆっくりと侵されてゆき、念じ事や思いをそれに吸い込み、さらにまた想像を拡げる時間をもたらしているのである。

時計の無い時代には、線香は時間を測るためにも使われた。遊廊で線香の火がともっている間だけ女郎と忍べたなどという粋な例もある。時が過ぎゆく気配と初めと終

りの気分が線香にはある。

話のもとに戻って、この中国廟の渦巻線香は何を意味しているのだろうか。おそらくそれは様式のためには丸められたのではなく明らかに蚊取線香と同じ原理に起因している。直線でなく螺旋線にすることで長さを稼ぎ、できるかぎり時間を伸ばそうという意図がうかがえる。



はかなさよりは、旺盛な希求がそこに感じられ、中国人ならではの宇宙観とでも言おうか。

理屈はともかく、いずこからかこのような形が完成し、それが群れ吊り下がるさまは私に強烈な形の原型を見せてくれている。宗教的な場だからだけでは言えない確実な形の言葉を発しているのである。今日のデザインで、幾何学的構成を意図したものが、応々にしてそれ止まりであるのに比べ、これには超越した造形言語がある。

地球上のいたるところで先人達が成立させたこのような原型をいくつも探し当てることができる。私は、自分の仕事にそうした存在感を継ぎ投入するように学んで行きたい。



株式会社高橋志保彦建築設計事務所
SHIOHIKO TAKAHASHI
高橋 志保彦
東京都港区芝1-13-16 芝橋ビル
TEL. 03-452-5443

私と広場

15年前に設計した“馬車道”以来、各都市の都心部のモールやプロムナードをデザインしている。車が大量生産化され世に湧き出て100年、あらゆる道路が占拠されてしまった。人と車と道路の関係を見直し、歩行者空間と都市景観の整備を柱に据えながら、法律より先回りして車を制禦したり車の通らない“みち”をつくる必要があった。私は以前から、このモールを“リニア広場”または“みち広場”として位置づけ、日本には江戸時代からあり、かなり馴染みの空間であって、その復活だと述べて来た。我が国には広場がなく、辻、社寺の境内、川原、橋詰等が広場的に使われて来た。モールは車のない“みち広場”として、歩き廻ることの好きな日本人には適したオープンスペースである。

それに引き換え、8年前に完成させた“開港広場”は、我が国に歴史のない広場の設計であり、それまでには都心部の公共の広場の好事例がなく、どうすれば横浜の大栈橋の付け根で山下公園への入口にもあたるこの場所に適し、人々が思い思いに使ってくれるかを長い間模索した。イタリア中世都市のシニョーリア広場をみると、シエナのパリオ、アレツツォの馬上槍突競技、フィレンツェのサッカー等、広場でイベントを行う。そのため中央部は空けて彫刻や井戸等は端にある。それに広場の周囲に建物が並び空間を引き締める。開港広場はロータリー部分なのでかなり違う。また広場の中央を空けても伝統のない我が国ではまだ使い切れない懼れがある。それなら見ている飽きない、子供も老人も親しめる水を持ち込み、入ってもよい水溜りがよい。そしてベリー、文明開化、波、姉妹都市というキーワードをデザインに取り入れようと考えた。オープンしてまもなく、5~6名の車椅子に乗った人達が訪れ、安全に散歩できるこんな広場が欲しかったと喜んでくれた。横浜



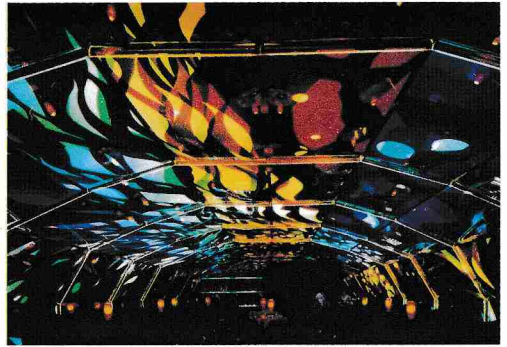
の一つの顔にもなったし、夏には子供達が陽気に遊び廻る。今年のライトアップ期間でも、クラシック音楽の中で、色のついた光が噴き上げる噴水を染め上げ、大人も小人も外人も、ここへ来るとたんに微笑み、光と水にたわむれていた。外国でも紹介したがユニークな広場だと好評であった。来年は拡張工事にかかることになっている。



スマ・ブライト・アート主宰
SUMA TSUCHIYA
土屋 寿満
大阪府大阪市住吉区杉本2-10-14
TEL. 06-698-2525

私と絵画 崇高と快楽の空間を光で演出する。

仏の救済を願う庶民の心が来迎図を生んだ。諸菩薩をしたがえて人間界へ下降してくる阿弥陀如来の姿は光にあふれている。キリストもマホメットも、その姿は光にあふれている。人間にとって、仏や神はつねに光にあふれ、光につつまれ、光を発するものとして立ち現れてくるものであった。光は霊力をもち、魔力をもつものとして、人間の根源の深いところにもつわりついてきた。それは光のコミュニケーション・パワーの無双さを示している。とするなら、光が人間の精神にもたらすインパクトを考えないわけにはいかない。人類はこれまで数限りない創造を手がけてきた。それらは神や仏の造型以外は、いや神や仏でさえも



光の反射によって知覚されるものであった。中世、近世、近代を通り過ぎててもその原則に変わらない。

なぜ、いつまでも光で見ることにこだわっているのか、光を見ることへのチャレンジがあつてよいのではないか。

この切望が光で描く絵画＝ブライト・アートを生んだ。光のもつキャラクターは多彩である。直進する。屈折する。反射する。散乱する。さらに視点のかすかな移動にも無数の変化をみせる。それは形象だけでなく、そこに光彩が加わってくる。万華でありイメージのサーカスである。しかも相対として存在するだけでなく、見る者をインボルブメントして見る見られるの関係をク

ロスする。

ブライト・アートはガクブチからとびでた環境の絵画である。広場の絵画としても機能するけれど、もっともふさわしいのは建築空間のアート化である。パブリックなものであれ、プライベートなものであれ、これからの建築空間は、きわめてアート化していく要請と傾向をもつ。あらゆるものが構造転換していくなかで、社会のアート化がすすむからである。そのとき、テクノロジー的な光の畏敬がもたらす世界を、ブライト・アートによって鮮烈に創りだすなら、われわれの生活環境は、さらにふくよかさを増すに違いない。



株式会社 榊アルプ設計室
TSUNEKATA NAIKOH
内藤 恒方
東京都渋谷区神宮前1-17-15
城西ビル301
TEL. 03-470-2039

遺跡と私——アンコール・ワット

今年の3月に2週間足らずの旅で、タイのバンコクとアンコール・ワットを訪問する機会を得た。アンコール遺跡のあるシェムレップには3日間滞在し、アンコール・ワット、アンコール・トムその他の遺跡を見てまわった。ここに来るまでのベトナムのホーチミンとカンボジアのプノンペンの旅の大変であったことも、アンコール遺跡群のすばらしさによって消しとんでしまった。世界の中心山で神々が棲むメール山を象徴した須弥山思想に基づいた石を積み上げた遺跡は、数百年の間密林の中に埋もれ自然のなすがままだになっていたのである。太陽の光の強い土地であり、特に3~4月は太陽が最上から差すために石積の凹凸、像の彫り、レリーフの光の当たる部分と蔭の濃淡が強く感じられた。朝の光から夕方

光まで刻々と変わり、微妙に変化する遺跡をゆっくり見ることができた。アンコール・トムの入口の門は7つ頭をもつ大蛇（ナーガ）の胴体で綱引きをする神々と阿修羅の54体の巨像が印象的であり天地創造を表現していると聞かされた。

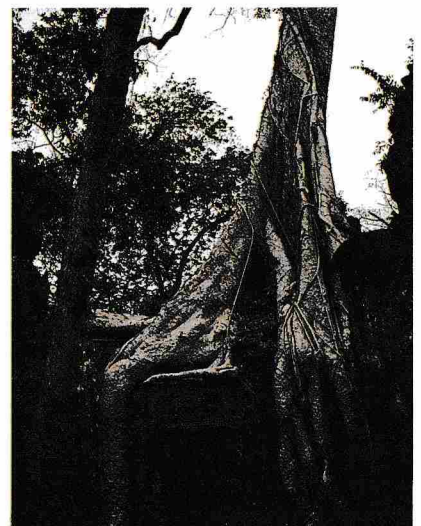
9世紀から12世紀にかけてできたモニュメントであるが、人々はいまだにアンコール・ワットの環濠で水牛と共に沐浴している。

遺跡は、密林の中で20メートルに及ぶようなガジュマルの大木におおわれていたといわれている。その他雨水や細菌によっても石の表面が冒され荒れている。この他幾度の戦争や盗掘による被害もひどいと聞いた。

人間の作り出した石積の遺跡であり、永



遠のものであり王の遺業を後世に伝えるものであったのが、維持管理がなされない間に自然との戦いとなりその現場を見ることができたのである。文化遺産として今日我々に伝えられている遺跡は多くみることができるし、また自然の強さによってもうほとんど原形がわからなくなってしまったものも多い。アンコール・ワットはいまだ自然と人間の綱引きをしている最中であり、ダイナミックであった。





ルナミ画廊
EMIKO NAMIKAWA
並川 恵美子
東京都中央区銀座4-8-11
善隣ビル3F
TEL. 03-535-3065

「ジャカルタの印象」

インドネシアの主都、ジャカルタは60年代の高度成長期の日本のようにビル、ハイウェイ等の建設ラッシュで大忙しだ、10年前に訪れた時とは雲泥の差だ。インドネシアのポスト・モダンと言えるユニークなビルが数多く建てられている。現代と戦後、60年代の日本と100年前の伝統的生活が渾然一体となって複雑で濃密な雰囲気を作り出している。

ジャカルタの町の交通手段は車とバス、オートバイ、ベモ（三輪オートバイ）だけで、電車や地下鉄がない。その為、道路は車で溢れている。信号も少なく交通ルールもないに等しい状態で、排気ガスをまき散らしている。高速道路は建設中だが庶民の足となる電車や地下鉄について考えなくてよいのだろうか？ 車道と人道の間、中央

分離帯にはヤシ並木、メイン・ストリートのロータリーには噴水とモニュメントが建てられ、緑豊かでブーゲンビリア等の南国の花々が美しい。人道は土が残され、屋台の飲食店、果物屋、鳥かご屋、植木屋、家具屋等が並んでいる。

モニュメントは、インドネシア建国の志気や民族統一を歌った具象彫刻が主で、抽象彫刻はほとんど見られない。クバヨランパルーのロータリーの男性像は、開発のたいまつを捧げ、インドネシアの勤労意欲の盛んなところを表わしている。目をむき出し口を開け、筋肉隆々とデフォルメされた身体は12.3mもある。第4回アジア競技大会（'62）を記念して建てられたのは歓迎の塔



で、高いゲイトの上の男女像が手を振っている。また、市の中心、スロパティ公園前にあるのはカルティニ像だ。封建制と植民地の長い暗黒時代を強いられたインドネシアの近代化に、女子教育の理想を抱きながら、1905年25才の若さで夭折したカルティニは、現在民族意識の母として国家の英雄と慕われている。彼女の誕生日4月21日は国民祝日で一万ルピ紙幣にも刷込まれている。何と、この像は1963年、日本がアジア善隣運動の一環として贈ったのだそうだ。私達にはあまり知られていない戦後がここにもあったのだ。

ポスト・モダンな高層ビルとこれらのモニュメントは一見不釣り合いに感じられるが、この国の現在を物語っているようだ。



南橋本テキスタイルアート
KYUKO HASHIMOTO
橋本 京子
東京都世田谷区松原6-24-21
TEL. 03-328-1324

「私と帯」

「一枚の写真」をタネにと、原稿依頼を受けて……。日々タピストリーを制作している中で近年の作品で特に考えさせられたことについてお話しさせていただきます。

一昨年ホテルナゴヤキャッスルのラウン

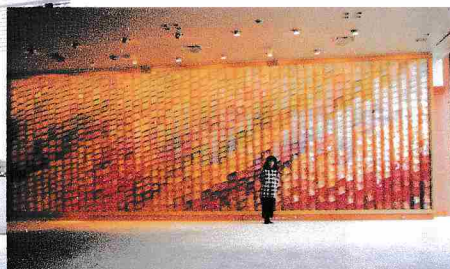
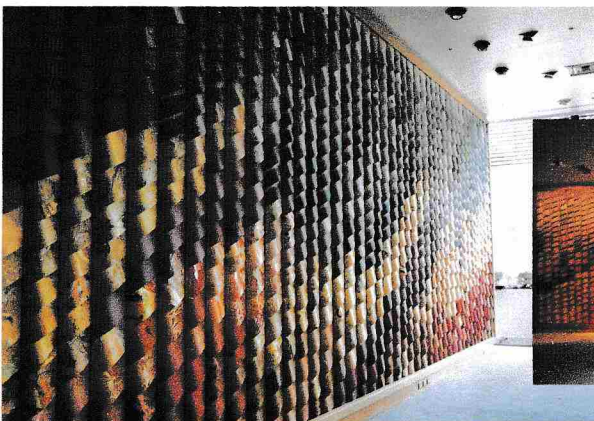
ジのためにタピストリーを制作いたしました。

ホテルを利用する世界各国の人々に日本の伝統をアピールするということをコンセプトにデザインしました。

作品は、横10M×縦4Mで、素材に袋帯など金袖緞子の帯を大量に使用し壁面全体に構成したものです。ここでのキーポイントは、外部環境（名古屋城の借景）と内部環境とをどのようにうまく橋渡するか、と、素材の大切さでした。常々インテリア空間におけるタピストリーの役割は、単なる装飾作品と言う意味合いに止まらず周囲の環境と如何様に接点を持つかということを考えてきましたが、今回はなかなか

か難しいものでした。

素材についても日頃素材自体を自分で作り上げ制作していますが、伝統の帯を使うことが大きな冒険でした。制作が進むに連れて、帯の高品質素材、技術の高さの素晴らしさに改めて考えさせられ同時に長い伝統に培われてきた織物の人を虜にする力みたいなものを感じた次第でした。話が少し変わりますが、最近頻りに色々な場所でタピストリーを見かけることが多く、関心の高まりを感じます。我々作家にとって非常に良い状況ではないかと思っております。このような傾向は、オーナーを始め建築家、インテリアデザイナーの方々のタピストリーに対する認識と評価が段々と深く、高くなってきた現われではないかと秘かに自負しています。また豊かなライフスタイルを背景に人々の自然への回帰、本物指向への欲求の中、タピストリーの持つ手の感覚、ぬくもり、手の工芸の大切さが少しづつ再認識されてきたのではないかと考えながら制作に励んでいる今日この頃です。





株式会社クレールプロダクション
KEIKO MURA
三浦 啓子
兵庫県西宮市甲陽園目神山町
21-12
TEL. 0798-73-0878

もう一つの建築素材「ガラス」を創る。

幼ない頃、裏の納戸で、ねこが子供を産んだと云う。私は、しのび足で、重い戸をこじ開け、ほの暗いその部屋に入った。強い日ざしがさし込み古いがらくたに反射している。そのかげで、いるいる子猫が沢山オッパイを吸っている。私は、固唾をのんで、この光景に見入っていた。どれ丈時間が経っただろう。私は、子猫から目をあげて、天井からの光を辿った。何と美しい光茫／光は、一つ一つ浮遊しているほこりに反射し薄暗いこの部屋を何と豊かにしている事か。私は、最近ローマのパンテノンや、トルコのハギヤソフィヤを訪れた時も何故かこの光景を思い出すのである。

最近ますます合理的で、美しく林立するインテリジェントビルに目を見る様になった。近代になって、工業技術が急速に発

展し、現在の画一的な板ガラスが産み出されて以来、建築の中のガラスの壁や窓には、表情がなくなってしまった。昔の建物に見られた手作りのガラスはもう消えてしまったのだ



ろうか。透明な存在感のあるガラスの表情がなつかしい。私は今、光の質を生み出すために、建築の中におけるガラスの創作に専念している。それは、今までのガラスのイメージを破って、1、力強さ、2、存在感、3、豊かな透明感、を表現したい。私は、1982年国際シンポジウムで講演したのをきっかけに、これらのガラスを、ドイツの工場で創ることにした。私達のスタッフとドイツの人達との奪鬪の経果次々と新しい作品が生まれつつある。I.M.Pビル、兵庫県庁舎、森工業等である。彼等は、私のガラスに対する考え方に心から共鳴してくれている。私が創作した新しいガラスが、どんな困難な問題も含んでいても、共に幾日も掛け綿密な計画を練り、製作に入るのである。皆キラキラと輝いている。そして



現場では、どろどろに溶解したガラスを大きな杓で汲みとり、素早く天板に流し込む。炎の中でのすさまじい肉体労働である。そして新しいガラスの誕生に、一せいに歓声があがる。ぶ厚い大きな一枚のガラスの完成は、私達の情熱と友情の結晶なのである。

幼ない頃、驚きの目を見はった光空間／今もそれに似た感動が、次の製作へと、私の夢をかき立てるのである。



株式会社三輪環境計画
MASAHIRO MIWA
三輪 正弘
東京都渋谷区恵比寿西1-20-4
恵比寿東邦生命ビル4F
TEL. 03-770-0038

私と家具

私が新建築の編集部をとびだして、山口文象のはじめようとしていたR1Aに参加したのは1954年だった。大学の級友だった植田一豊に旗上げの檄をとばしたら小倉からいち早く馳せ参じていた。やがて近藤正一が画家猪熊弦一郎の紹介で加わった。

すでに新制作派協会に絵画・彫刻部のほかに建築部が設けられていて、会員だった山口が出品する家具の制作に夢中になって協力した。小住宅の数々をやたらにつくりまくっているなかに、展覧会出品作が収用されていた。

1957年に、アメリカのミュージアム・オブ・モダンアート(N.Y.)のコレクションを中心にした絵画・彫刻・建築そして家具の作品群が、京橋の古い建物を前川国男が改装してできたモダンアートミュージアムの中に

あふれた。家具はすべてが椅子で、トーネットの曲木椅子2点を筆頭に31脚の選び抜かれたモダンの代表作が光彩を放っていた。

強い衝撃をうけた私達は、これからのこのこと家具デザインに夢中になった。

毎日工業デザインコンクールでも、第1回の天童木工のコンペでも、山口の、すなわちわれわれの作品は金賞をとり続けた。

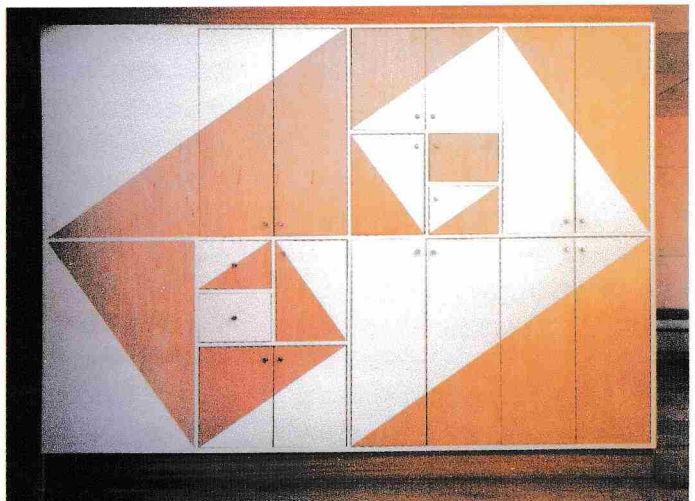
わたしは17年間R1Aにいたが1945年に

みんなと別れて独立する決心をした。その頃ちょうど、“オカムラ環具70”のコンペが開催されていたので、私はR1Aの若手の川崎、山本両君とともに挑戦し、2席に入賞することができた。今から20年前1席の300万円をとり損ったのは残念だったが、当時の100万円は

嬉しかった。

三輪環境計画をはじめてからも家具デザインは力を入れたかったが、社長にはその時間をなかなか与えてもらえないのが残念である。

写真の収納家具は、東京吉祥寺の小住宅にしつらえたもの。1:√2 等比展開による一種のスパイラル図形をネガポジに組合わせた、ややグラフィックデザイン気味の作品だ。





日本鑄造株式会社 開発事業部
景観エンジニアリング部
造形デザイン室
池田 尚子

長野シンポジウムに参加して

さる7月21日(土)に開催された長野シンポジウムに出席させて頂き、著名な先生方の示唆に豊んだお話を伺えたことは、またとない機会でした。

記念講演会では、現代の日本人がいかに“カルチャー”に飢え乾いているか、世論調査や歴史的背景を踏まえた解説がなされました。また、便利さと心の豊かさとは互いの領域を進出したり、巻き返したりとせ

めぎあっており、調和した状態を見出す必要性についても気付かされました。

私は“カルチャー全盛”と聞くと、黒板塀に見越しの松、といったお宅の隣りに唐突に建てられたロココ調の家、という光景を思い浮かべるのですが、続くシンポジウムでは、小布施町の街づくりが取り上げられ、地域性や統一感を重視した、何よりも住民が参加する、生きた景観づくりが行われており、成功を収めていることを知り、認識を改めました。小布施町が現在のような独自の色を持つようになるまでのプロセスも非常に興味深いものでした。発端は北斎美術館が建てられ、他県からの来訪者が増えたため、「お客様のために家の中をきれ

いにする」必要が生じてきたということでしたが、パネラー(宮本氏)の方はそれについて「修景デザイン」という言葉を繰り返して使われていました。

今までの風景がある日突然壊されて、かわりに誰が見てもあまり美しいとは言えないようなものが建てられる、ということが、今は当たり前のようになっていますが、小布施町のように町並みを少しずつ修繕してゆく、本来の姿に戻す方向で整備するという手づくりの味わいがむしろ新鮮に感じました。

今後もこのような場が設けられ、回を重ねる度になお一層充実度を深められることと思っております。



大塚オーミ陶業 顧問
酒井 貢

小布施の街づくりに感銘!

炎暑の7月21日、AACA'90長野シンポジウムでの記念講演、植木前文化庁長官の「地域の文化、景観について」、続いて芦原会長内井先生他名士によるパネルシンポ「自然と環境」-ゆとりある美しい芸術的環境の創造に向けて-を拝聴し多大の啓蒙を受けた。

翌22日早朝長野市内から一行バスで約30分目的の小布施町に入った。町当局の出迎

えをうけ織のひろば胡桃葉繁る老大樹の下で、この町の修景に特に緑の深い宮本忠長先生(前日のパネラー)の現地説明を聞き、同氏の案内で高井鴻山記念館、栗の小径に続く北斎館を見学した。

奇しくも7年前宮本先生のご指導で隣接の老舗小布施堂新屋の家宝北斎筆掛軸「傘風子」図を大塚オーミ陶業の大型陶板(240×250㎝)で拡大製作し、同店新装の社屋外壁に取付け緑の庭園を飾ることとなったが、当時訪問した頃の街中心部を想起して今日の修景更には周辺の街並み整備に至っては、正に面目一新すばらしい景観を現出されているのに驚きを感じた。

古い伝統と歴史を持つこの町が、宮本先

生のお言葉通りそこに暮している住民の心情と生活ベースを尊重しつつその基盤の上に立ってトータルな街の景観を創出した正に象徴的街づくりになっている様に思われた。

事は必ずしも大小の問題ではなく、古きを温め新しき知るとは斯くの如き街づくりをいうのであろう。今や街の景観は住民のゆたかな心を凝集した文化的盛り上りを捉えて、修景創造をする時代になりつつあることを痛感した次第である。

終りにAACAが昨年は京都で今夏長野で催したシンポジウム、共に清新で爽快な雰囲気譲す企画であったが、今後も地道な活動を重ねて本協会への共感を拡げてほしいものである。



日本鑄造株式会社 開発事業部
景観エンジニアリング部
造形デザイン室
竹本 真理世

長野シンポジウムに参加して

長野シンポジウムにパネラーとしていろいろお話し下さった先生方はそれぞれが個性を持ち、お考えを持っているのだなというのがひしひしと伝わってきました。それ故に一つの作品を創るのにいろいろぶつかってしまうというのもよく理解できます。しかし、自分がこれだけは大切だと思ったことをゆずってしまうことは、自分が表現したいと思うことを曲げてしまうことで、それは作品を創る上では一番よくない

ことなのだと思います。先生方もいろいろ話し合っつてぶつかるともあるがそれはかえっていいことなのだと感じていました。そしてそれは一番むずかしくて大切なことなのだと思います。

まだまだ自分は、考えがないな、とも思っています。地域性のことや、地形のこと、芸術的なことなど、いろいろな方面の先生方もいらっしや、そういうことなどもいろいろな角度から物を考え見るといことこの勉強になったと思います。やはり、各方面から物を考えるということは、使い心地がいいとか、その場所に建っているというのがびったりだとか本当の意味での良い物をつくるためには、欠かせないものだと思います。

ました。

このシンポジウムでは、忘れていた大切なことや、自分の勉強不足を感じました。また、聞くだけでなく、参加した人たちとのコミュニケーションなどもとても良いと思います。また、次の日の見学会もシンポジウムでの話をより解りやすく、実感として強く印象に残るものにしてくれました。これからもこのようなシンポジウムを意欲的に行い、また、その土地の人たち大勢もこのようなシンポジウムに参加することは、個人ではなくみんなで景観をつくるんだという意識をもたせる良い機会だったと思いました。



中川 幸成

A. A. C. A. 長野シンポジウムに参加して

7月21日、長野放送NBSホールで開催されたシンポジウムは広いホールが満席となり、地域社会との交流を含め極めて有意義であったと思う。以下所感の一端を述べてみたい。

(1)基調講演

植木浩氏（国立近代美術館長）が、かつてパリの日本大使館で文化担当参事官として勤務した折の経験をもとに社会と文化、国と文化のかかわり、欧米人の文化に対する考え方等話をされたが、その中で本年度の文化庁予算が432億と聞き改めて同氏が長

官時代（本年6月まで）にさぞ歯痒い思いをし、且つ苦勞も多かったのではと推察、GNPが世界の15%近くを占めるこの経済大国に現在最も欠落しているのは心の豊かさ、文化を求め心ではないかとの思いを新たにした。

生産性の追求も大事だが、企業も我々も人間社会の本当の豊かさを考える時期に来ていると痛感した。

(2)シンポジウム

自然と環境というテーマであったが、パネラーの市川教授（東京学芸大）が人文地理の立場から、日本列島は北から南まで3000キロ、桜の開花一つをとっても1月から6月までと幅があり、異なった気象条件、環境にあった設計、材料が建造物に配慮されるべきとの指摘があり各分野の専門家の総合が、選りよい環境、建物の創造に不可

欠と感じた。

(3)小布施の町作りを視察して

長野市の郊外で栗以外これと言った特産もなかった町が、日本の情緒を町中に醸し出し、一見別世界を感じさせる町並みに強烈な印象を受けた。担当した宮本、市川両先生及び町当局の意欲、情熱が町民の支持のもと、見事に開花した事例として特筆されると同時にやれば出来るの希望をもたらした意義は大きい。

(4)連日、熱帯夜の続いた東京から、長野行きを決めたときには、避暑気分が潜在意識にあったが、涼しいどころか日中は全く東京と変わらず、朝晩の風のみが僅かに信濃を感じさせてくれた。

今後、機会を捕らえて各地で地域交流を行い相互理解を深めながら住みよい環境作りを考え、文化を前面にだすことがAACAの使命と思う。今後の活躍に期待。



三上 清一

長野シンポジウムと小布施

小布施は是非訪れたいと思いながら、今迄に幾度となく機会を失って来ていた私は、今度こそはと云うことで、何のためらいも無く参加を申し込みました。小布施に関しては、永い年月ご苦勞を重ねて来られた宮本先生から、直接お話も伺って居りましたし、雑誌その他で写真も随分と拝見して居りました。しかし、どうしてあの信州の山の中の小さな町で、あかも見事な現実が成立したのかな、と云う辺りのことが、私の

胸中には今一つ腑に落ちない思い、としてわだかまって居りました。遠くでは見えないうか、がああ地にはあるのではなからうか、と云うこだわりみたいなものでした。そしてその予想的中しました。それだけでもこのシンポジウムは、大きな収穫を私に恵んで呉れました。

初日の午後から用意された、植木前文化庁長官の記念講演、そして見学会で拝見する予定の建築の作家の先生方、をパネラーとするシンポジウムを伺っている中に、私の胸の中のわだかまりは、スーッと残り火が消え去る時の様に小さくなって行きました。そうだったの、道理で、という感じでした。先生方のお話の中から私が教えられたことは、小布施のまちの地底深くに、流

量豊かに潜む文化の伏流水の存在でした。それは昔から、菜種油の生産と供給と云う安定し産業に支えられた、地域文化の濃厚な蓄積であり、しかもある時期その流れの中心に、高井鴻山と葛飾北斎の二人の人物が居た、という歴史的

事実でした。そしてその地底の伏流水を探り当て、手間とひまを掛けて、そこから地上にパイプを引いた“今の人達”が居たから、あの見事な現実が小布施にはあるということ、この様な舞台装置と配役の妙さ、私は寡聞にして他にその例を知りません。私の胸はずっきりとしました。それは北斎がこの世に生を受けた18世紀から、今日の20世紀を経て21世紀へと、延々と続く壮大なまちづくりのドラマの一コマとも云えるもので、今眼前に展開するその情景は、宮本先生とまちの人びとが、ともに主役を演じる「小布施のまち修景の場」の一幕の一カットではないかという思いが、翌朝現地を訪れて、歩いて、観て、得た私の実感でした。そしてこれからも続くであろうこのドラマを演ずる小布施のまちの人達の、平和と、しあわせ、を祈らずには居られない気持ちにもなりました。そこに住む人びとが深く関わって、営々と削り続けてこそ「いまち」は出来て行く、改めてその実像を見ることによって受けた感動も、私には得難いものでした。

それにしても、暑さが印象に残る、長野の二日間でもありました。加えて、帰京の列車を待つ間に数人の人達と立寄った戸倉の駅近くの、地酒屋での冷酒と、わかさぎの甘露煮の味、も又忘れ得ぬ格別のものでありました。

万端の準備をして下さった皆様に厚くお礼申し上げます。有難うございました。



(社)日本建築美術工芸協会+菊川工業株共催 メタルワークのストリートアート デザインコンテストについて

運営：(社)日本建築美術工芸協会
 主催：(社)日本建築美術工芸協会、菊川工業株式会社
 後援：文化庁、(社)日本建築学会、(社)商業施設技術団体連合会、(社)日本美術家連盟、(社)日本インダストリアルデザイナー協会

この度、表記コンテスト実施に際し、皆様方より格別のご支援をいただきまことに有難うございました。このことについて、結果等ご報告申し上げます。

先ず、本年(平成22年)5月22日(火)の日本建築美術工芸協会理事会にて第1回デザインコンテストの実施を決定、その後同コンテストの趣旨ほか詳細を審査会等にて決定しました。次号(No.5)を特集として詳細報告します。

- 第1回審査会 1990年6月6日(水)
 午後6時よりホテル・オークラ(応募要項等作成)
- 第2回審査会 1990年6月13日(水)
 午後6時より協会会議室(応募要項等作成)
- 登録(応募申し込み) 1990年6月26日(火)
 午前10時半より発表
- 図面の提出 8月21日(火)より9月11日(火)
 登録の締め切り 8月31日(金) 登録数:768
 応募数(有効図面提出数):279 応募率36%
- 第3回審査会 1990年9月17日(月)
 12時半より建築会館5階会議室にて開催
 (作品の審査・賞の決定)
- 結果の発表 1990年10月16日(火)
 午後3時の予定
- 表彰式 1990年11月27日(火)
 午後6時半の予定
 (協会設立記念会に併せ執り行う)
- コンテスト窓口：調査研究委員会
 委員長 池田武邦
- 審査員長 嘉門安雄氏
 審査員 宋久庵憲司氏、豊口 協氏、
 松本哲夫氏、柳澤孝彦氏、
 宇津野和俊氏
- (なお、審査員はすべて協会正会員です。)

応募の対象と件数

対象	用途名称	件数
休憩系	ベンチ	92
修景系	噴水、橋、 シェルター様のもの	18
照明		48
衛生系	ゴミ箱	17
	水飲み、手洗い	6
交通系	地下入口	16
	バス停	9
	信号機	4
	その他(ガードレール、 フェンス、手摺等)	9
情報系	公衆電話	14
	ポスト	12
	時計	11
	サイン	9
身体障害者系		2
複合的なもの(複数機能)		7
その他		5
計		279

入賞者

- 最優秀賞 POND-SKATER
 (1点) 加藤圭介様(21歳) 筑波大学学生
- 優秀賞 ストリートファニチュア スクリーン
 (2点) 上田啓行様(23歳) 株式会社設計に勤務
 メロディー手摺
 金田 透様(22歳) 新潟大学学生
- 準優秀賞 街路灯
 (6点) 角館政英様代表(26歳) 藤ライティング・
 沢田隆一様 プランナーズ・ア
 ソンエイツに勤
 務
- URBAN SHELTER街路樹
 清水泰博様(33歳) 建築・プロダクト・デザ
 ン事務所
- BUS STOP
 田原尚直様(23歳) 九州大学学生
- ENTRANCE TO SUBWAY
 西山満規様(23歳) 金沢大学大学院生
- TRIANGLE COMPOSITION
 宮武一弘様(32歳) 大高建築設計事務所
 都市と川-ストリートアートによる接点の演出
 柳 泰彦様(29歳) 梓 設計に勤務
- 佳作賞 BENCH
 (10点) 赤股圭子様(18歳) 大阪市立工芸高生
 レストコンプレックス
 片瀬一郎様代表(26歳) 武蔵野美術
 和泉田仁美様 大学生
 TAO OF MILKY WAY 天の川の道
 近藤秀樹様(24歳) 樹ウオーターデザイン勤務
 チューブトレイン KENJI DESIGNSTU
 境沢健次様(43歳) DIO
 SEATING SYSTEM FLOATING
 清水泰博様(33歳) 建築・プロダクト・デザ
 ン事務所
- HALF WING (一人掛けベンチ)
 布目和也様(29歳) アトリエONE ON ONE
 手紙のなる木-集合住宅用ポスト
 本間隆司様(22歳) 広島大学学生
 モニュメント 東西南北
 峰田順一様(39歳) 遊メーカー
 BENCH METAL LEAVES
 森 一英様(33歳) 佐賀県庁勤務
 システムダストボックス
 渡辺安徳様(36歳) 渡辺安徳・アースワーク
- 以上、入賞は19点となります。

A.A.C.A. トーク

各回1回の会費(茶代とも) 1千円

- 第24回 1990年10月12日(金) 午後6時~午後8時
 ゲスト 近江 栄氏(協会理事・建築家・日本大学
 教授)
 テーマ：コンペ・シンドローム(症候群)を糾す
- 第25回 1990年11月13日(火) 午後6時~午後8時
 ゲスト 大久保婦久子氏(日本芸術院会員・革工
 芸家)
 テーマ：私の道-革の仕事-
- 第26回 1990年12月11日(火) 午後6時~午後8時
 ゲスト 会田雄亮氏(陶芸家)
 テーマ：環境造形としての陶芸
- 第27回 1991年1月18日(日) 午後6時~午後8時
 ゲスト 矢吹 宏氏(建築家)
 テーマ：ライフインテリア
- 第28回 1991年2月8日(金) 午後6時~午後8時
 ゲスト 池田武邦氏(協会理事・建築家)
 テーマ：建築と美術・工芸-私の経験-
- 第29回 1991年3月15日(金) 午後6時~午後8時
 ゲスト 加藤有次氏(国学院大学文学部教授)
 テーマ：粉食文化論-うどんと日本人-

主催 社団法人 日本建築美術工芸協会
 東京ガス株式会社銀座ポケットパーク館

協賛 日新工業株式会社

以上の企画・運営は事業委員会(委員長 中島
 昌信)が行っています。

発行：社団法人日本建築美術工芸協会

Phone 03-457-7998

Fax 03-457-1598

〒108 東京都港区芝5-26-20

建築会館6F

振替：東京 1-365085

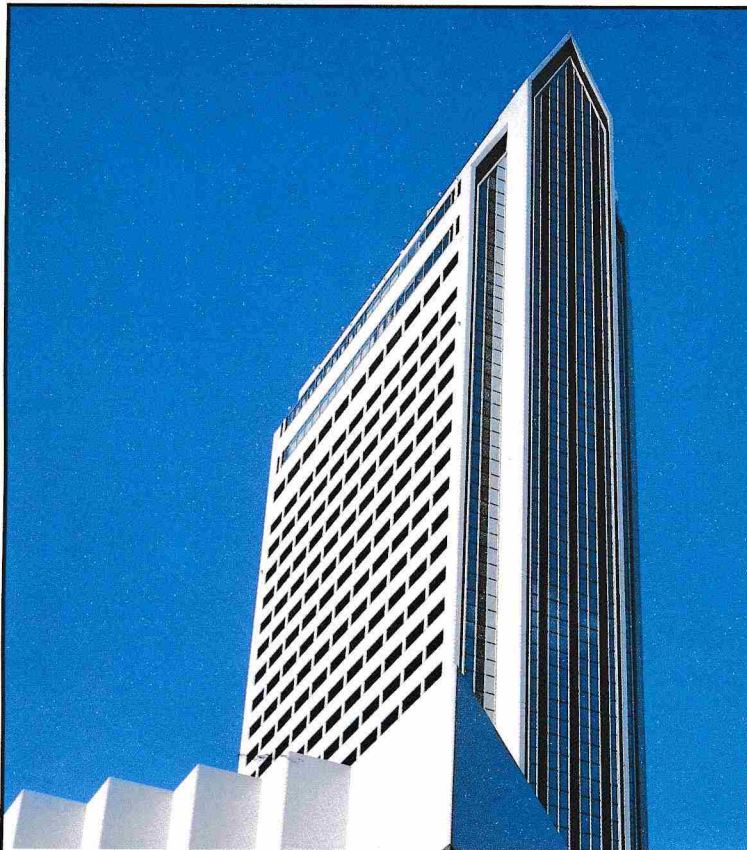
編集：(社)日本建築美術工芸協会広報委員会

柳澤孝彦(委員長)、宇津野和俊(副委員長)

大多了介、小玉功、高部多恵子、玉見 満

土屋 巖

製作協力：株式会社SP建材エージェンシー

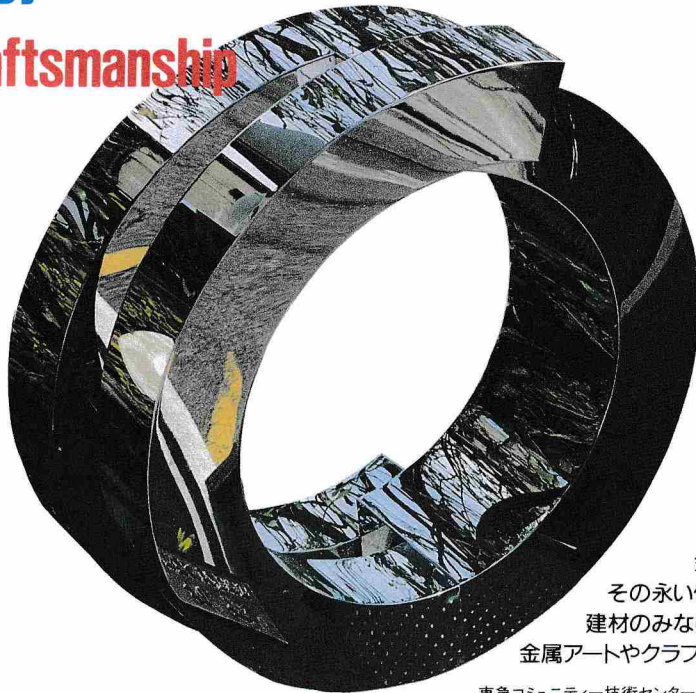


文化の表層

タイルは、時間を越えて存在を主張する。
 タイルが集まった時に生まれる表層は、
 差異化しているように思える。
 薄いけれど深い、時間と空間が凝縮された
 文化の表層である。
 TOTOエクステリアタイル。
 豊富な形象を備えて表層に文化を追う。

東陶機器株式会社 東京支社 / 〒105 東京都港区虎ノ門1-1-28 ☎03(595)9600

Technology
 &
Craftsmanship



Tajima
 ARCHITECTURAL METALS

〈田島〉は、創業以来70有余年。
 建築の内外空間に、
 金属製品を造りつづけています。
 その永い伝統をふまえた価値ある技術は
 建材のみならず、モニュメントやレリーフなど
 金属アートやクラフトの分野にも生かされています。

東急コミュニティー技術センター(東京) モニュメント ステンレス・ミラー仕上

株式会社 **田島順三製作所** 本社 〒100 東京都千代田区永田町2-14-3 赤坂東急ビル ☎(03)581-6291

●海外部(03)580-0021 ●大阪(06)203-4151 ●仙台(022)225-5844 ●横浜(045)212-3281 ●名古屋(052)571-5231 ●四国(0878)62-9541 ●福岡(092)771-7461 ●特販事業部(03)5561-0241

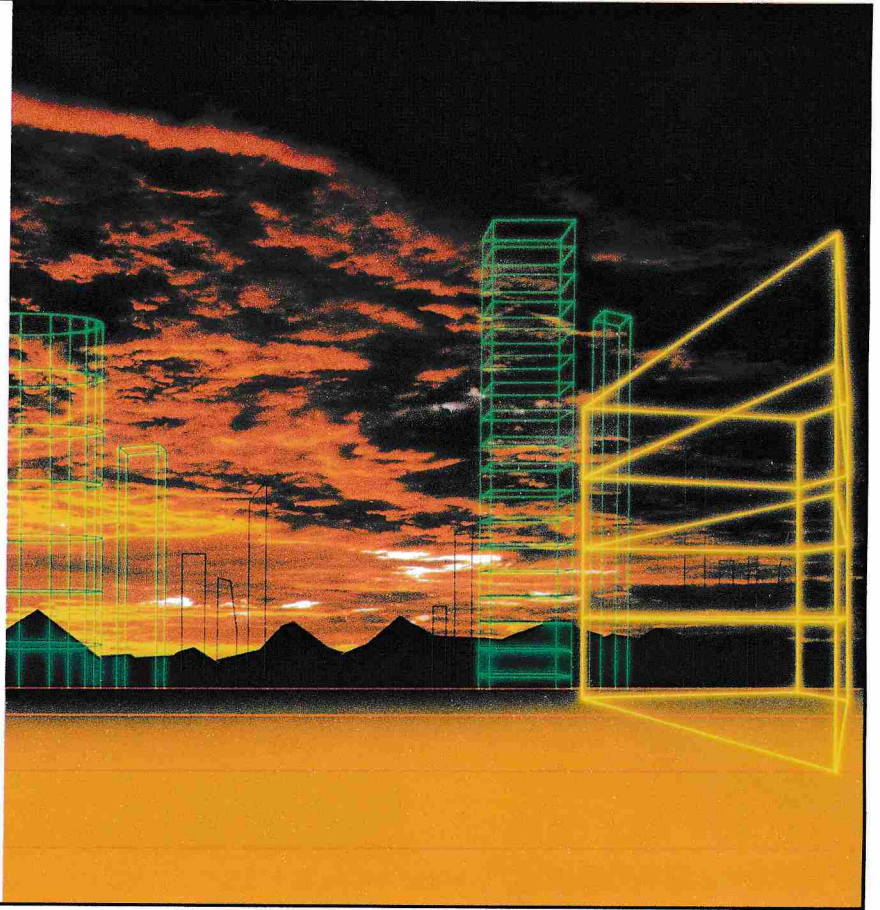
新しいデザインの建築は
 未経験の工事を伴うもの
 どんなビル建設にも
 絶対かかせない防水工事
 ゴムメーカーならこそ
 初めて成し得た完全防水。



東洋ゴム工業株式会社

化工品事業本部・環境システム営業本部

東京本社 〒151 東京都渋谷区千駄谷4-24-15 TEL: 03-404-6219
 大阪本社 〒550 大阪市西区江戸堀1-17-18 TEL: 06-441-8703



出会い、創奏の美学。

美術彫刻・壁面レリーフ・インテリアオーナメント
 建築装飾一般・モニュメント・オブジェ
 時計塔・サイン・フェンス・都市環境施設一般

黒谷美術株式会社

営業部 環境造形チーム

●本社 富山県新湊市奈呉の江10-7 〒934 Tel 0766-84-8111代
 ●東京営業所 東京都港区赤坂6-4-2 〒107 Tel 03-505-5700代
 ●立山工場 富山県中新川郡立山町浅生1 〒930-02 Tel 0764-63-1233代

音楽がよく聞こえる
 誰も聞いていないのに
 ちひさなフーガが
 花のあひだを
 草のあひだを
 染めてながれる
 (立原道造詩集より)

詩人は、
 いったいどんなメロディーを
 聞いたのだろうか。
 光りと風が織りなす協奏か。
 それとも、
 大地の深い息吹きか。
 自然が奏でる無垢の旋律、
 ふくいくと、限りなき精妙——。
 私たちは、
 そんな、陽炎のような浪漫を
 見つめ続けた詩人の魂こそ
 大切にしたい。
 自然の中で、
 自然と共に生き、考え、創る。
 それが、黒谷美術の
 マインド・ベースです。

▲多摩ニュータウン 堀の内・四季の路公園

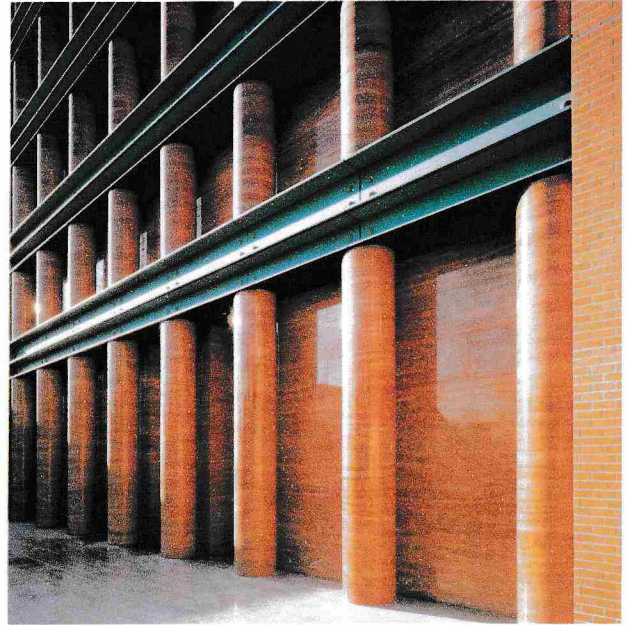
創造の「手」と「感性」で メタルワークの新しい可能性を追求する

産業界のあらゆる側面で、コンピュータをはじめとするハード&ソフトのハイテク化が進む一方で、人の個性や感性といったよりヒューマンなぬぐめが求められている現在、私ども菊川工業は、建築部門におけるメタルエンジニアリングの理想を目指し、職人の手わざを継承しつつ、現代技術との融合を図っています。そのひとつが職人の卓越した技術をシステムティックに統合した大規模な「メタル工房」…ここからは、単なる金属加工物でない、「工業と芸術の接点」あるいは、「機能と官能との交点」とも言うべき文化的価値を秘めた作品が生まれてくると大きな期待を集めています。金属の持つ可能性を最大限に引き出し、創造的な感性と技術で建築界に更なるエポックを作りだそうとしております。

菊川工業

菊川工業株式会社

本社 ● 東京都墨田区菊川 2 18 10 ☎ 03 634 3231 〒130
 第1・2部 ● 千葉県印旛郡白井町白井工業団地7 ☎ 0474 92 0141 〒270 14
 菊川金属工業株 ● 千葉県印旛郡白井町白井工業団地7 ☎ 0474 92 1141 〒270 14
 キクカワM&E株 ● 大阪市西区北堀江 2 9 20 102 ☎ 06 535 4381 〒550
 テクノ・プラザ ● 千葉県印旛郡白井町白井工業団地7 ☎ 0474 92 0141 〒270 14



ホテル・イル・パラッツォ

コーニス仕様 材質・銅板2.0% 仕上・緑青
 建設地 福岡市中央区
 設計監理 基本設計・アルド・ロッシ
 実施設計・金子満／弾設計
 施工 辰村組

都市・人間・環境のハーモニー



素敵をおこすエネルギー！



長谷工 コーポレーション

グループ企業

長谷工不動産 長谷工 コミュニティ
 長谷工都市開発 長谷工 ライフネット
 長谷工 アーベスト HASEKO (U.S.A.) Corporation



人にやさしい街づくり。



創業1610年

TAKENAKA

竹中工務店

〒541 大阪市中央区本町4丁目1-13 TEL.06(252)1201
〒104 東京都中央区銀座8丁目21-1 TEL.03(542)7100